

モンテッソリー断想

内 山 憲 尚



一、芽を出さなかつた種

モンテッソリーの名前は学生の頃から聞いてはいたが、モンテッソリーの教育を初めて知ったのは大正一四年である。

いつもの通り神田神保町の電車通りの古本屋を覗いていたら、目についたのが「モンテッソリー教育法真髓」という六三六頁の大冊の本で、たしかその当時の金で一百五〇銭だったと思う。(今日の三千四百五十円) なかなかの大金である——清水の舞台からひと思いにとんだ気持ちで買って帰った。

大正四年九月一七日発行、著作者は当時教育界に新しい指導的地位を確保していられた、河野清丸氏で、発行所は北文館(定価二百四十銭)この本を通読するに及んで、モンテッソリー教育の外郭を知ることができ、モンテッソリーに関心をもつようになった。

「モンテッソリー教育法真髓」はモンテッソリー女史がローマのサンロレンツ・マルシ街に開設した、彼女の「児童の家」に独自の幼児研究理論を実験したものをもとにして書いたといわれる「モンテッソリー教育法 (The Montessori Method—1912)」をもととして、いくらかの評論解説を加えたもので、実に親切丁寧に訳述されている。

河野清丸氏はモンテッソリーの教育法に非常に感激させられて、これをわが国に紹介普及しようと決心された。同著の自序に「初めモンテッソリー教育法の世に伝わるや、余は唯時代の新思潮なるが為、単に好奇心の驅る所となつて、之が英訳を繕けり、而して読むこと三、四〇頁、其の研究の真面目なるに驚き、愈々進み益々襟を正すを禁せず。再読三読此の書の如く余を刺衝し、啓発したることなきを感じたり」とある。

直ちに筆をとって、大正三年に「モンテッソリー教育法とその応用」を出版して、モンテッソリーをわが国に紹介した。この本は、あまりにも簡單すぎたので、続いて、全訳に解説を加えて出版したのがこの『真髓』である。

河野清丸氏は更にモンテッソリーの研究に没頭し、昭和三年には「門氏教育法の詳解及批判」という大部なものを出していられる。

河野清丸氏が、モンテッソリーの教育の普及のために多くの努力を払い、立派な著書を数冊も出版して宣伝開発につくしたが、なに故、モンテッソリーがわが国に完全に紹介されなかったかというところの原因に三つのものがあげられると思う。

第一は、河野氏が教育学者であり、ことに一般教育、普通教育界の人であったということ、第二は、氏が幼児教育とは関係が少く、幼児教育界への浸透が不充分であり、ことに幼児教育の実際面への働きかけが足りなかったこと、第三は、当時のわが国の幼児教育界はフレーベルの教育思想及び教育方法一辺倒でとうてい、その他の幼児教育思想をとり入れるだけの余裕がなかったことであると考えられる。

河野清丸氏のまいた種は、とうとう芽を出さずに今日になったわけである。

二、モンテッソリー

マリア・モンテッソリーは一八七〇年三月イタリアのミラノに生れた。フレーベルが生れたのが一七八二年だから、フレーベルの後八八年に生れているわけである。

フレーベルが彼の幼児教育思想「人の教育」を世に出したのが一八二六年であるからその時にはモンテッソリーは四四才で、ローマ大学で哲学科を出て、国立異常児学校の実際教育にも関係を持っていたのだから、おそらくフレーベルの「人の教育」にも目を通していたことだろう。しかるにモンテッソリーの著書には「人の教育」のこともフレーベルのこともふれていないのは、モンテッソリーが、彼女独自の科学的感覺的なオースドックスな幼児教育法を樹てようという気持ちからはなかつたろうか。

モンテッソリーは、ローマ大学医科に入學、一八九四年医科を卒業、イタリア最初の婦人ドクターとなる。二四才の時である。大學卒業後、その附屬病院の助手として、主に精薄児を取り扱ったが、その間フランスの有名な精薄児教育者セガン(E. Seguin)の影響を受けて、精薄児は医学上よりもむしろ教育の問題であると唱えて、ローマに国立異常児学校を作る機運を盛り上げ一八九八年これの設立を見るにいたった。同校開校と同時にその実務に当り二か年余世話をした。

その間ロンドンやパリに精薄児教育の研究視察に行き「異常児の教育法は正常の幼児にも役立つものである」と言う確信を得た。

そこで、教育学、心理学等の研究を思い立ち、また、ローマ大学の哲学科に再び入学し、七年間実験心理学、教育的人類学の研究をした。かたわら各小学校の児童について研究を続けた。

たまたま一九〇五年にローマの貧民街建築改良協会がその附近に教育施設を作ることになったので、その依頼を受けて三才から七才までの子どもを収容して、**児童の家** (Casale Bambini) を一九〇七年一月に開校した。女史は実験学校として教育理想を實際に移した。

イタリア各地にも児童の家が設立され、更に海外の和、英、独、米などにもモンテッソリー主義幼児教育が次第に普及してきた。ところが女史のこの運動が建築改良協会自体の性格から離れてきたので終に一九一一年同協会と袂を分ち、独自に幼児教育に専念した。

一九一三年にはローマで指導講習会を開き、各国で国際講習会を開き世界的運動を展開した。英、米をはじめモンテッソリー協会が生れて研究の歩を進めている。評価を怠っていた本國のイタリヤでも一九二九年二月にローマ市郊外にモンテッソリー教育実験学校を設置して、モンテッソリー教育の再認識とこれの幼小学校教育の革新を期すことになった。

三、モンテッソリーの教育

モンテッソリーの教育は、児童の性善説を認めその上に立てられ

たものである。故に児童の人格を認め、児童の本性の個人的自然的発達を許すことから自由をその教育の根本要件とした。(後年ムッソリーニのファシストが政権をにぎるようになり、一九二三年頃から国家統制が行なわれることとなり、モンテッソリーの自由主義教育に対しても国家主義的干渉がなされ、ついにモンテッソリーはオランダに亡命することになったのである)従って教師は児童のよき観察者の立場において教育に当り、無暗な干渉、矯正(きょうせい)を行なってはならない。児童自身の自発によってのみ、仕事をなし、教育活動が行なわれる。故に訓誡や罰は一切用いてはならない。訓誡や罪は子どもにとっては「心の腰掛け」にすぎないといっている。

以上の教育理念は多分にフレーベルの教育理念と相通するものがあり、あるいはフレーベルの「人の教育」に影響されているのではないかも知えられる。

フレーベルとちがうことはそのすべてを、医学、心理学、生物学、人類学に結びつけて基礎づけせんと試みている点で、女史自身も科学的教育法であると称しているゆえんである。

モンテッソリーは環境の教育については生活と結びつけ常によき環境を構成しその中で子どもを生活させることが必要であると論じている。

モンテッソリー教育の特徴は教具に見出すことができる。あらゆる感覚——触覚、筋覚、温覚、味覚、視覚、聴覚、嗅覚は、科学的

立場から、全教育の場に活用され生かされなければならないとし、百種類に及ぶ感覚教具が考案されている。

○ 児童の家のプログラム

○ 朝礼・会話

朝の挨拶、服装、持ちものの整備、会話は話し合いで前日のできごと、教師が宗教的な話などをする。

○ 実物教授・知育

時間	内容	適要
9.00~10.00	朝礼・整備・会話	前日のでき事・宗教的な話
10.00~11.00	実物教授・知育	観察・名称教授・感覚教育
11.00~11.30	体操	
11.30~12.00	昼寝	
12.00~ 1.00	自由遊び	
1.00~ 2.00	戸外遊び	自然教育
2.00~ 3.00	手工	粘土細工など
3.00~	戸外	

知育は次のようなものが含まれる。

知育

- (1) 内容
 - 名称教授
 - 観察力
 - 感覚の複雑なもの（目かくしをして当てる）
 - 幾何形態の分解（辺、角、中心などの分解）
- (2) 自発教授——教師より注文せず、児童自ら進んで研究する。

○ 体操

体操を次のように分類している。

- (1) 人類学的体操——人類学上の原理から、発達の不完全なものを補う（機械体操、平行棒など）
- (2) 自由体操——機具を用いない体操
- (3) 教育体操——指頭練習（ボタン、ホック、紐結びなど）
- (4) 呼吸体操——呼吸、発音練習

○ 自然教育

動植物の飼育、生活現象の観察、自然の観察、自然に対する感情など

○ 読み方書き方

線、三角など、スベル練習など——カードを用いて行なう。

○ 言語

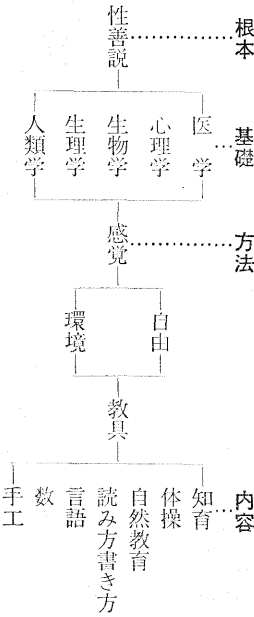
話し方、正しいアクセント、静粛練習など

○ 教

実物計算、長短（メートルによる）計算箱（カードを用いてやる）

彼女の感覚教育の思想は、人体の諸機能は精神物理的関連にも役立つものと確信し、感覚教育は知的教育の基礎となり得るものとなり、従ってそれは知育に先行すべきものとした。そして三才から七才までの児童にとって幼児たちがそれを繰り返して使用する間に、自ら誤りを訂正し、ものを正しく判断し、行為を正しく決定する知的能力が自然に養われてゆくものであるとなした。

モンテッソリーの教育思想体系を表示すれば



四、インドとモンテッソリー

ムッソリーニのファシストに追われて、モンテッソリーはオランダに亡命した。オランダにおいても欧州の大戦の余波を受けてあまり活発なる展開はみるに至らなかったようである。

女史はインド行きを思い立って、一九三八年マドラスに落ちつ

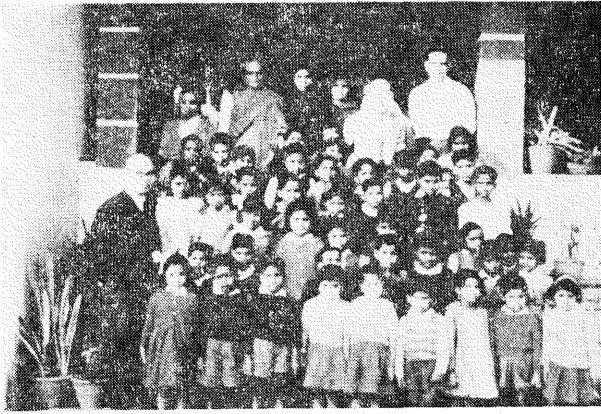
き、ここでトレーニングスクールを開いた。

それまでは英領インドとして、英本国からの宣教師が布教の立場で開設した、キンダーガールテンがあつて、たいていフレールベル主義により、保育料も無料であるか極めて低廉なものであつた。

モンテッソリーの理想は「クラスー」名として小規模の施設で開園でき、ミッション的な性格をおびていないということが、インドの共鳴を得た。ことに、タゴールやガンジーなどの要人の協力援助を得るようになって、トレーニング・スクールもマドラスの外ボンベイ、カラチ、アーメダバードなどで一か年ないし二か年のコースで開かれ、ここで養成された人たちが、モンテッソリー教育の中心となつて、農村にまで普及するようになった。

ガンジーは、ダキルフセイン副大統領にデリーにモンテッソリー主義幼稚園を開かせ、これを「ナイタリム」と称した。ナイタリムとは「新しい教育」の意である。これにならつてインドの各地にモンテッソリー主義の幼稚園が生まれた。現在インドにおけるモンテッソリー幼稚園の概数は次の如し。

- マドラス 一〇〇〇
- ボンベイ 一〇〇〇
- カルカッタ 五〇〇
- デリー 二〇〇
- ベナレス 二五



バナナ
その他

一一
三〇〇

インド中に三千三〜四百から四千ぐらいと思われる。(キシヨレ・ダル幼稚園ラニジイト・バハイ氏談)

インドのモンテッソリー教育研究会の本部はカルカッタにあり、A・M・トーステンという人が会長をやっているそうであるが、あいにく筆者がカルカッタに着いたのが土曜日の午後で、翌日は日曜

なので、会長に会えなかったのは残念であった。

五、キシヨレ

・ダル学
園幼稚園

今回のインド旅行中、どこかでモンテッソリー主義幼稚園を見たいと思っていたら、バナナでうまく日があきそうなので午

キシヨレ・ダル幼稚園

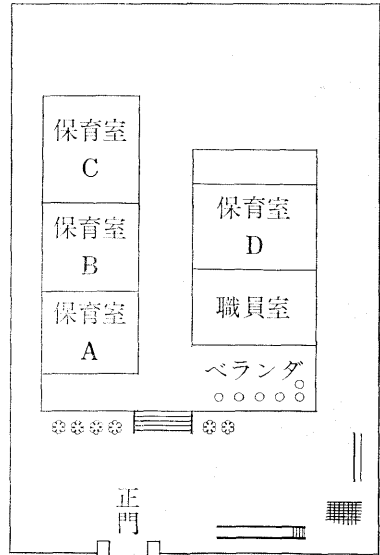


表 通 り

後バトナ市の中央にある、キシヨレ・ダル幼稚園を參觀させてもらうよう交渉してもらった。

大通りの表通りに面した、平家建ての幼稚園で、インド式で床の高い建物である。敷地は一五〇坪ばかりの中に七十坪あまりの木造建築で正面の門から入ると前庭が四〜五〇坪で、ここにスベリ台、ジャンブル・シーソーなどの運動具がならんでいる。正面玄関のところはベランダになっていろいろな積木鉢がたくさん置いてある。

保育室は四室で、一〇坪から一三〜四坪のもので窓が小さいので部屋は明るくない、カラー写真がとれないくらいで、白黒のフィルムを持って行っていなかったので室内の写真がとれなかったのは残念。

念だった。

年少組(A)(B)は七、八名で年長組(C)(D)は一三、四名であるから一〇坪から一三、四坪の部屋で充分である。——モンテッソリーの理想が一クラス一〇名というので園長はこれを守っている。しかもこれがインドでの常識である。アメリカでも一クラス二〇名からせいぜい三〇名である。日本のように四〇名から五〇名のところは世界のどこにもない。

年少組は四型に足をなげ出してすわっている。みんなは、だしだ(これはインドの風習で子どもは、小学校でもはだしである)年長組は机にかけて作業をしている。

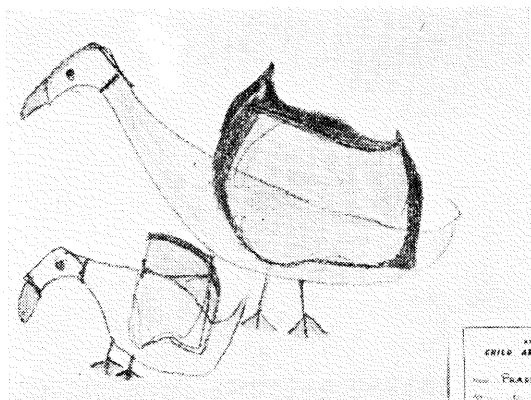
保育の実際をバハイ園長が案内してくれた。ことばは家庭でインド語(ヒンズー語)を用いているので先生はヒンズー語を使用しているが年少組から英語を教えている。

ちょうどAクラスでは英語の時間だったが教科書を使用せず、A、B、Cのカードを並べてネコの絵の下にC・A・Tを置いてネコのスヘルを教えている。モンテッソリー法による教育である。

次のクラスではお話をしていた。四型になった一〇名あまりの子どもに先生がお話をしている。童話らしかった。部屋の周囲には机がならんでいて、モンテッソリーの教具が数種類ならんでいる。

年長組では算数でこれもモンテッソリー式の計算板を使用して加算をやっていた。今日わが国の一年生の算数のように眼から入れる

固いクレヨンでかいた絵—6才児



方法である。園長は加減の初歩は年少組でやり年長組では掛け算の初歩を取り扱うといった。

壁には幼児の描いた絵が貼ってあったが、わがくのようにクレヨンのやわらかいので自由に描かせるようなのはなく、鉛

筆画か固いクレヨンの絵である。

製作は単純で切り紙、貼り紙などが多い。このパトナの町には州立の工芸研究所があって見学したが、なかなかいいものがあったが幼児の教育にはその片鱗(へんりん)は見ることができなかった。

保育の目標として次の六つのものをあげている。

○友情と明朗な気持ちの育成。

○生活に役立つ新しい技術を身につける。

○才能を伸ばし教養を高める。

○共同生活、どうして他の人と仲よくしていけるか。

○新しい友だちを迎え、新しい土地や新しい町を知り、新しい知識をもつ。

○心と身体を健全に伸ばす。

バハイ園長は、先年アメリカのモンテッソーリ研究大会に出て、アメリカを視察してきた熱心な教育家で、「常に新しいことを求め、常に前進することのみが教育の生命です」といい、職員室の上にかかっている、学園のモットー：「Tomorrow for Our's」と大書したものを指した。日課フロについては夏と冬とではちがいが、夏は日中が休みになるが、基準のものを示せば次の如し、

午前——朝・集まり（朝礼）

紹介（その日の予定）

集団遊び

保育室の保育

昼食

休けい

午後——散歩

保育（スポーツ・音楽・ゲーム・スカウティング等）

見学（社会観察）

お帰り

放課後の職員会

となつている。なお、スカウティングというのは、インドではボーイスカウトが盛んで、小学校教育の中にボーイスカウト教育がとり入れられてスカウト訓練をやっている。幼児にはカフスカウト的な訓練やゲームを取り入れているのである。

経営と管理はわが国のように文部省があつて画一的な統制をやるのではなく、アメリカのように州によってまとめており、州の教育会が関係をしている。

ほとんどが私立の幼稚園でキショレ・ダル学園にしても園長の個人経営で幼稚園と孤児とを預つて、職員は五名のクラス担当の女の先生の外に男子の主事一人、婦人の主事一人で四〇名ぐらいの幼児で、保育料は一ニルビーである。インドでは大学卒業初任級が七〇ルビーで小学校長級で一ニ〇ルビーで、一ニルビーの保育料の出す家庭は中以上の家庭だそうである。それにしても四〇名の園児では経営はたいへんだ。園長は「州からの補助もなく苦しい経営が続けています。創立以来二〇年この狭いところがまんしてききました。しかし教育をするという仕事に打ち込んでいることをありがたいと思つています」と言つておられた。

わが国の近頃の幼稚園のように、開園すれば一五〇名も二〇〇名も集まり、一組四〇名以上五〇名もひどいになると六〇名もを取容して、幼稚園を企業と考へている園長にバハイ園長のこの姿を見せてやりたいものである。

（駒沢大学・鶴見女子大学）